

**朝ジョギングをしていて
出会った男の子
童貞の彼に**

**経験豊富なお姉さんである私が
たっぷりとセックスを教えてあげました
結局その日は何時間もぶっ通しで
彼と溶け合い続けました**

少しだけひんやりする5月下旬の朝。

その日は日曜日で珍しく予定が入っていなかったこともあり、私は近くの河川敷で軽く走って汗を流すことにしたのです。

格好は白い短パンに薄桃色のTシャツ。

走るのに快適な格好ではありましたが、やはり素肌で風を切ると少し冷たく感じました。

それでも空からは爽やかな日光が照りつけていました。

私は25歳のショップ店員です。

高校を卒業してからしばらくは、実家が建築会社の経営をしておりますのでその事務の仕事をしていました。

しかし、幼少の頃からファッションが大好きだった私の中に新しくアパレル関係の仕事に就きたいという想いが芽生え、現在は実家を離れ、ショップ店員をしながら服や大好きな帽子について、楽しみながら勉強をしている毎日です。

私は清掃が行き届いた美しい河川敷を颯爽と走ります。

運動もずっと大好きで、バレーボールにテニス、さらには女性では結構珍しいと言われるが兄や父に影響されて野球なんかも見るだけでなく実際にするのも好きだったりします。

しばらく走ると、背中にうっすら汗ばんでいるのを感じました。本当に清々しく心地良い休日のひとときと言った感じです。

小さな橋の下に差し掛かりました。

ふと右側を見ると、小さな男の子が体育座りのような格好で蹲っています。

どこか苦しいのかなという風に見えました。

もちろん赤の他人です。そのまま通り過ぎてもよかったのですが、私は気分的にも時間的にも余裕があり、何となく放っておけませんでした。

「あの・・・君??大丈夫かな?こんなに明るいのになんな暗いところで蹲って・・・」

妙なお節介だったかもしれないと彼の反応が気になっていました。

「・・・うん」

声にならないような声。蚊が鳴くような力のない声が、地面に顔を向けたままの彼から聴こえてきました。

そしてその声を発してすぐ、ゆっくり顔を上げた彼。頬に引っかき傷のような跡があり、顔はひどく衰弱しているように見えました。

私は彼のその顔と、汚れた服、少し濡れてジュークジュークになった靴、そしてその雰囲気、そのまま放っておくことは出来ないと思いました。

私は大きくて広い川のそばに住んでいます。

私の自宅近くの川辺には広い公園があって、野鳥の楽園などとも呼ばれている良い場所です。

ジョギングを始めて１５分くらいだったでしょうか、まだ遠くまでは来ていませんでした。

彼は会話する力も失っているようでした。

弱っていてまだ足取りの覚束ない彼の手を引いて、私は自宅まで彼を連れて行ったのです。

病院へ連れて行こうかなどとも考えていましたが、自宅のソファに座らせて温かいココアを飲ませてあげると少し彼は元気を取り戻してきた様子でした。衰弱していただけで、病気とか深刻な状態ではないことが分かり私も安心しました。

話せるようになった彼は、ありのまま私に事情を話してくれたのです。

「・・・そう・・・そんなことがあったの・・・」

静かな朝のリビング内。二人ともリラックスした状態。

私は彼の話聞き終えてそう囁きました。

彼は同級生達からいじめられ、どこか遠くへ逃げたくなり、親には言えないまま一人で自宅を飛び出しここまでやって来たとのことでした。

まあよくある”家出”という感じでしょう。

彼の住む町はこの街に隣接すらしていない遠く離れた場所。

彼はずっと一人で歩いてきて衰弱していたのです。

しかし私が部屋でしばらく話を聞いてあげたことで、彼は元気になって無邪気な笑顔も出るようになっていました。

お腹も空いていたようなので、ジョギングを始める前に作っていた朝ごはんのサンドウィッチとフルーツを彼に食べさせてあげました。

そしてその後、汚れてドロだらけになっている体をシャワーで流した方が良く、私は彼に入浴を勧めました。

彼は喜んで、土で汚くなった服を脱ぎ捨てて浴室へと入っていききました。

私はそのまま彼の服を洗面台横の洗濯乾燥機へ放り込みます。

“ファサッ．．．．”

上がってきた彼は、実に顔色が良く完全に元気を取り戻したという感じでした。

彼の素顔はとても素直で甘えんぼうさんの男の子。それから、色々な話をしてリビングで過ごしました。

「．．．．ってことがあったんだよ。凄いでしょ？まだ起きたばかりなのにさ！」

「キャハハハ！！ほんと凄い！それってだけど本当に偶然なの??」
彼は衰弱していた時が嘘のように饒舌に話すだけでなく、無垢な顔で私に甘えてくるのです。

私の太ももを触らせて、とエッチなことを言ってきたり、少しワガママな子でしたがそこも許せてしまいます。

私はそんな彼が次第にまるで弟みたいに思えてきて・・・とても可愛い年下の男の子でした・・・。

彼の汚れた服は洗濯機の中でぐるぐる回っています・・・。

土で汚れた体はシャワーで洗い流し、彼の体からはボディソープの香り。

私の手料理が美味しかったと何度も褒めてくれました・・・。

そんな彼に私は・・・。

“つらい思いをしてきたのによく頑張っているね”

実のお姉さんのようなそんな優しい気持ちで・・・。

“彼の最後のワガママ”を聴いてあげることにしました。

「ゆっくり外して．．．．リラックスしてね．．．」

もうすっかり乾いたボディタオルを腰に巻き、真っ直ぐ私を見ている彼。

ベッドの前で私達は立ち上がった状態で向かい合いました。

静かな室内。

廊下の上のほうに、白い空気が立ち込めています。

締め切られていない小さなシャワールームの開き戸から、二人が連続で入浴した跡に残った白い湯気が流れて天井に上っているのです。

彼の“ワガママ”は言葉ではありませんでした。

小さなボディタオルなんかではとても隠しきれないくらい大きくなった股間が、一生懸命ワガママを言っていたのです。

“お姉さんとセックスがしたい”と。

私が浴室から上がって来たその姿を見て、彼の股間がその要求を一気に外側に示したのです。

彼は腰の後ろに手を回し、結び目をゆっくりと解きます。

” ファサッ．．．．”

乾いたタオルがヒラヒラとフローリングの上に舞い降りました。

大きな彼のペニスが、上を向いてヒクヒクしています。

顔はこんなにあどけなくて可愛いのに、ペニスはとっても遅しくて・・・。

「お姉さんも・・・見せて・・・」

興奮と欲びが混ざり合ったような表情で彼。

きっと、私のおっぱいやお尻も・・・もしかしたらお尻の穴なんかも・・・女の人の“あらゆる部位”に興味深々なのでしょう。

「分かった・・・見せてあげるね・・・」

———体験版はここまでとなります———